

あ と が き

今回の紀要第53号には、18調査班24編の学術報告（通常原稿22編，特別寄稿2編）を掲載することができた。原稿の集まりようは、これまでになく早かった。これは原稿提出規定の改正の影響というよりは、執筆者・事務局・編集委員の皆様の連携プレーの成果と考えている。また今回からの試みとして、「投稿予定申請書」により、早めに投稿計画を準備できたことが、功を奏した一員と考えられる。関係各位の多大なるご協力に感謝したい。

「特別寄稿」には2件の応募があり、いずれも掲載することができた。特別寄稿は、投稿規定にある通常の調査報告とは別に、調査に関わるトピック性やテーマ性のある原稿を若干数募集したもので、これまでも紀要第51号で、旧木沢村の土砂災害の緊急調査報告を取り上げた実績がある。新たな発見があり速報性や緊急性が必要な場合、特に調査成果が多かった場合など、今後もこの企画を活用し、特色のある原稿をお寄せ頂くことを期待したい。

さらに、今回の第53号から、要旨とキーワードを加えることにした。2006年10月開催の編集委員会での検討を踏まえた紀要原稿作成・提出規定の一部改正によるものである。いきなりのことで、執筆者のとまどいもあったかと思われるが、快く協力頂いたことに感謝申し上げる。要旨は論文内容の要約を規定の文字数で示すもので、英論文の abstract や summary に相当し、最近の論文や報告書では付けるのが一般的になっている。キーワードは論文の主題や内容の鍵となる単・熟語（地域や、研究対象などの名称も含む）を示すもので、いずれも論文検索や WEB 検索の際に利用されることが多い。

阿波学会50周年記念行事にはじまった紀要の WEB での開示作業は、現在も継続して進められている。WEB バージョンの場合、「発行からある時期までは、第一段階として、論文タイトル、著者、要旨とキーワードまでを開示する。これにより、阿波学会と紀要の存在を広く知ってもらうとともに、内容の詳細への読者の関心や興味を高め、阿波学会紀要本誌への問い合わせが増えることを期待したい」という普及と広報に向けた委員の建設的な発言が、要旨とキーワードを加える提案につながった。

改正の3点目は、句読点を「、」と「。」の組み合わせにしたことである。阿波学会紀要は横書きであり、この組み合わせは、高校の教科書やセンター入試などで、科目・分野にかかわらず統一的に使用されているスタイルでもあり、社会的な実績も踏まえた汎用性のある表記方法であろうという委員会の総意により、導入することにした。

なお、投稿責任者については、① 学生・院生以外でメールが使える環境にあり、② 査読結果の原稿修正やとりまとめができ、③ 印刷段階で校正が速やかに対応できる方、という条件でお願いした。校正から出版までの作業の円滑を祈りたい。

表題の地域名表記については、報告書表紙にあるように、地元からの要請があった、三好市「旧東祖谷山村」で統一した。

最後に、阿波学会紀要の英文表記を裏表紙につけることにした。これは、紀要掲載論文が、欧文の論文に引用される際に必要なものである。一昨年はさる財団から阿波学会の活動の照会があり、本年は、紀要掲載論文を科学技術振興機構（JST）の論文リストに掲載したいとの寄贈依頼があったように、近年、紀要掲載論文が、県内に留まらず国内外からも注目される状況にある。英表記については、これまで、“総合学術調査報告”、“郷土研究発表会紀要”と表記してきた経緯と内容をふまえ、紀要の性格を表すのに最もふさわしい、“Proceedings of Awagakkai”を採用した。「阿波学会」の名称については、その活動が他に例を見ない、まさに“オンリーワン徳島”の学会でもあり、固有名詞として扱うのがふさわしいという編集委員会での意見が反映された。

最後になりましたが、紀要報告書で公開されている成果や裏付けとなる基礎データは、単に当該年度の総合学術調査期間の成果に留まるわけではない。その背景には、参加学会や班員の不断の課題探求があり、阿波学会の地域貢献はその成果の上に成り立っていることを読者の皆様ならびに関係各位にはこの場を借りてご披露したい。引き続き、関係機関・団体ならびに会員諸氏の連携と協力をお願いする次第です。

紀要53号発行に支援いただいた関係各位には、紙面をお借りして厚く御礼申し上げますと共に、益々のご発展をお祈りします。

（石田 啓祐）

阿波学会紀要編集委員会

委員長	石田 啓祐	副委員長	中野 真弘		
委員	石尾 和仁	小川 誠	川添 和義	近藤 孝造	
	仙波 光明	平井 松午	堀江 秀茂	和田 賢次	